

# 教育長だより No. 30

2022年3月18日

## 子どもの仲間づくりの前に まず、先生の仲間づくりを

ちょうど30年前の話です。私は大阪から近江八幡市の中学校に異動して、中3の担任(学年9クラス)となりました。「やんちゃな子」が何人もいる学校だったからでしょうか、結構力量のある先生が多かったように思います。いや、むしろ「生徒に鍛えられた」という方が正しいかもしれません。そんな中、冬場になって困ったのが一人の若手の先生。県北部から1時間ほどかけて通勤していました。朝、学校で雪がちらつくと、その先生から電話です。「すみません。雪で2時間ほど遅れます。」とか、「雪で車が脱輪したので、午前中休みます。」などなど。(転勤初年の私は「県の北部は雪で大変なんやなあ。」と実感しました。どうも今より昔は雪が多かったと思います。) こういう電話が入ると、学年の教務担当の先生が慌てました。その先生に代わって授業の「空き」を埋める必要があったからです。つまり、「空き時間」の先生が交代で1時間ずつ自分の教科に変更してそのクラスで授業をすることになります。当時の中学校では「自習」はあり得なかったからです。もちろん、生徒指導上の問題からです。私は社会科でしたから、慌てて教科書のページを印刷して授業をしたものです。どの先生も突然の授業変更ですから大変だったと思いますが、みんな気前よく授業に入っていました。でも、多くの先生にとってその日の唯一の「空き時間」という場合が多いので、自主学習ノートなどの点検をと考えていたと思います。私もそうでしたが、昼食時間などに慌ててノート点検などをしていました。しかし、こういう事態が続くとみんな疲れてきます。「このやんちゃな学年を何とかこの14人の学年教師集団で育てよう。」との思いに少しずつひび割れができてきます。2月になると、「あっ、またやな。」という声も聞こえるようになりました。でも、「卒業まで!」とみんな必死でした。

こんな学年を経験したので、私は次の年(年度)、3年から1年へと担当学年が変わった4月1日、学年主任に次のような提案をしました。(中学校は基本的に1年から2年、2年から3年へとクラス替えはありますが、ほとんどの教員がその学年の子どもたちを「持ち上がり」ます。)「子ども(生徒)に『仲間づくり』って言うてるんやから、ぼくら教師どうしの仲間づくりをもっと強化しませんか?」と。私はその趣旨をていねいに主任に話しました。学年主任の先生は「面白そうやね。」と、その日のうちに合意。早速、学年の主なメンバーと協議してくれ、実施することになりました。

当時は学校週5日制の導入期で、ひと月のうち半分の土曜日が休みになったころでした。ですから、一週おきに土曜日の授業がありました。確か4月20日ごろだったと思いますが、土曜日の授業を終えてその日は午後の部活（1年所属の顧問の部活だけ）を5時に切り上げて、午後6時に宿泊施設である近江八幡厚生年金休暇センター（現在の「ラッコリーナ」：バームクーヘンで有名な『たねや』の所）に集まりました。（学年14名のうち13人の教員が参加。一人は病欠でした。）

風呂と夕食を済ませて、7時半ごろ一番大きな部屋に。そして、一人ひとりが「語り」しました。テーマは「なぜ教師になったのか?」「教師になってうれしかったこと、あるいはつらかったこと」「こんな教師をめざしたい」などです。日頃の学年会（当時、その中学校では学年会を週1回、または2週間に1回実施していました。）では生徒指導や学年行事、あるいは学級活動や道徳の進め方など、学年運営の内容ばかりを協議していました。上記のような「お互いが腹を割った話し合い」をすることはまずありませんでした。

ここでは一人ひとりが自分の思うようなことを語っていきました。しゃべりだすと一人20～30分かかった人が多かったです。5～6人が終わったところで、「次は、・・・私が言います。・・・。」と30代後半の先生。「・・・・・・。」しばらく沈黙が続きました。そして、「実は・・・私、・・・今年が最後や思ってます・・・。」と続けました。90歳近い祖母の世話をしていること。最近、いわゆる徘徊が増えてきて、そのたびに近所の人にも手伝ってもらって採し回ることが多くなっていること。仕事と介護、そして、わが子の子育てと、これらの両立が難しくなっていることなどを、ポツリポツリと、そして、涙ながらに話されました。「一日一日がギリギリいっぱいです。・・・去年もみなさんに迷惑ばかりかけてしまって・・・。そんなんで、私、・・・この一年で仕事やめなあかんて思ってます。・・・。」

「先生、よう言うてくれたなあ。わてらのことは気い使(つこ)うてもらわんでええで。あんたがそこまで追い込まれてるなんて、わてが気づかんかって・・・。申し訳ないのはこっちやわ。」と答える先生がいました。この人は前日まで「うちは参加するけど、しゃべらへんで。そんでよかったら行くわ。自分のことなんかしゃべりとうない。」と言っていたんです。その先生が一番彼女に返してくれていました。学年の教師集団挙げて彼女をサポートしようという状況になりました。ただ、それだけでは彼女は困るだろうから、勤務時間内のできる仕事はきっちりやってもらおうとなりました。

その後も「なんで教師になったんか」「やめたいと思ったこと」「感動的な出会い」など、この話し合いは夜遅くまで続けました。こうして、学年の教師がお互いの「教育にかける思い」を理解することで、教師集団づくりが進んでいきました。

**「子どもに仲間づくりって言う前に、まずは先生の仲間づくりや。」って、私はつくづく思います。ただ、先生方の仲間づくりの方法は何もこの事例だけではありません。いろいろなやり方があると思います。今時、宿泊を伴った研修なんて難しいでしょう。学校(園)や学年運営のための会議ではない、先生たちが「お互いを理解する場」がいるのではと思います。校・園の教職員がみんな教育(保育)をしていくうえでの土台です。4月の新しいスタートを、忙しさに流されることなく、みなさんの新しい発想で展開していただけたらと思います。期待しています。**